

「……なるほど。身分証はお返ししますよ」

高級セレクトショップの奥にある、防音の効いた部屋。重厚な革張りのソファに座らされた私は、返された身分証をおそろおそろ受け取った。

「あの、私、本当に万引きなんて、していません。……なにも取ってないです……」

「はい、わかっていますよ。誤解だったケースも多いんです。ちゃんと確認します。……まあ、そのために少し時間もらいますけど」

悠真と名乗ったお店の人は、穏やかな笑みを絶やさずに私を眺めている。それなのに、私はじわじわと追い詰めていく静かな圧を感じていた。

「大丈夫ですよ、そんなに身構えなくて。俺、こういう対応には慣れてますから」

「慣れている、ですか……」

「はい。これでも店長なんです。……といっても、今

はほとんど副店長に店をお任せしちゃってますが」  
「そうなんですか……」

悠真さんはどう見ても20代後半くらいだ。

髪も明るめで、顔立ちは整っているけど少しチャラそうにも見える。服はシンプルなシャツにズボンだけで、言われないと店長とは気づかない。

けれど軽い雰囲気の中に、簡単には逆らえない空気を感じて、私は思わず息を詰めた。

悠真さんが、ゆっくりと立ち上がり、私との距離を詰めた。高価そうな香水の香りが鼻を突き、威圧感に心臓が跳ねる。

「じゃ、盗んでいないか確認をするんで。今は俺の指示に従ってもらえると助かります」

「は、はい……」

「まずは上着を脱いでいただけますか。……何かを隠し持っていないか、俺が直々に『身体検査』するんで」

「え、えっ……？　で、でも、そんなの警察を呼んで……」

「警察、ですか？」

悠真さんは困ったように首をかしげ、軽く笑った。

「本当に何も盗ってないなら、俺が確認しちゃった方が早くないですか？　警察を呼んで大事にするか、ここで俺に協力して潔白を証明するか。……賢い選択ができますよね？」

「それは……」

（確かに、警察が来て大事になるのは怖いし……上着を脱ぐだけなら……）

私は着ていた上着を脱いだ。この下はシャツだけだけど、ポケットがついているわけではないので何も隠すことはできない。それなのに悠真さんは満足した様子も見せず、私に近づいた。

「いいですね、その判断。素直な人の方が、俺も対応しやすいんで……。じゃ、シャツを脱いでください」

「で、でもこの下なんて何も隠せないです。あとはインナーと下着、くらいで……」

彼は私の周りをゆっくりと歩きながら、まるで品定めをするような視線で全身をなぞった。

「確かに薄いシャツですが……最近の万引きの手口は巧妙なんで。この下に、薄い商品を隠し持っていないとも言切れないんで」

「そ、そんな……！この下には何も……」

「うーん、でも脱いでもらった方が確かなんで」

「えっ……！？ そんな。脱ぐなんて、そんなの、おかしいです……！それに私、本当にしてません！」

「まあ、それを今から『検査』しましょうか」

彼は私の背後に回り込むと、耳元で熱い吐息を漏らしながら囁いた。

「ほら、立ったままだと落ち着かないでしょ。そこに座ってください」

「けど、あの……」

「ちゃんと……隅々まで、確認しましょう」

逆らう間もなく、肩に置かれた手に促され、私は部屋にあるデスクの上に腰掛けた。悠真さんはその両側に手をつき、私を逃げ場のない檻の中に閉じ込めてくる。

「疑わしいことは徹底的に調べないと。それが俺の仕事だし、あなたもシロだってはっきりわかった方がいいですよ？ だから協力して下さいね」

悠真さんは軽く笑って、私のシャツの第一ボタンに指をかけた。

（ど、どうしよう……確かに、なにもしてないってはっきりわかった方がいいけど。でも、シャツを脱ぐって……けど、インナーもあるし、大丈夫、かな

……)

ぷちり、ぷちりと小気味よい音を立ててボタンが外されるたび、店長室の静寂に私の心許ない呼吸が混じっていく。

時間をかけ、ついにすべてのボタンが外されて、シャツを脱がされた。

黒いキャミソールのインナーからブラが所々見え、私は恥ずかしくて顔を俯けた。

「中も『確認』しますんで」

「え、え。やっ！」

悠真さんの手がはだけた胸元から、ブラの中に彼の指が滑り込んだ。そしておっぱいを掬われ、揺さぶられながらその感触を確かめるように揉まれる。お店の一室で自分のおっぱいが揉まれている光景に、くらりと眩暈がするようだった。

「……あれ。ちょっと、怪しいですね……。なんか

固いものがありますね……」

悠真さんの指が乳首を掠めた。

「ひょっとして、うちの商品だったりします？」

「ひぁっ！？」

悠真さんは私の乳首を、まるで新作の質感を確かめるような手つきで、きゅっと摘んだ。

「うーん、ますます怪しいなあ」

「ひ、ひゃんっ！ち、違います……っ、それは、その……っ」

「もっとよく確認しないと」

「え、え。あの……！ま、待って！」

悠真さんは喉の奥で笑い、服の上から器用にブラジャーのホックを外した。締め付けから解放され、露わになった私の胸を、下から掬い上げるようにしてゆっくりと揉みほぐされる。時折、指先が乳輪を

カリカリと執拗に掠めるたびに、脳が痺れるような快感が走って下腹部の奥が熱くなってしまう。

（胸、触られちゃってる……どうしよう、声出ちゃうかもっ……）

「ん、ふっ……っふっ、は、っ……♡」

指でつまみ、引き伸ばし、そして強く揉み潰される。乳首が硬くなっていくのが自分でもわかった。

「しっかり確認したいんで、インナーと、ブラジャーも、外しちゃいますね」

「んえっ！？」

悠真さんがぴしゃりと言って、あっという間にインナーとブラを取られてしまう。あらわになった胸の乳首はぷくっと腫れていて、私は恥ずかしくて顔を俯けた。



「もっとちゃんと『身体検査』した方がいいですかね。隠匿物がないか、温度の変化まで調べないと」  
「温度の、変化って……ひぁっ！？♡あ、ぁっ♡」

ぷちゅ♡という淫らな音と共に、離れていた悠真さんの唇が私の胸に戻ってきた。唇より内側に、にちゃり♡と触れ、吸い上げられる。

「うそ……悠真、さんっ♡ んんんっ♡♡」

にちゅ♡ ぬりゅり♡と、乳首全体が悠真の熱い口内に包み込まれた。

固く尖った先を解そうともみくちゃに揉みしだかされると、胸がびりびり♡して熱が広がっていく。おかしい。万引きの疑いをかけられて『身体検査』を受けているだけのはずなのに。

「ん、ん……離して、っ♡ はうっ♡♡」

「んちゅ♡ ……なんですか？ まだ、はぁ、不審な点がないと確信できてないですよ」

「だって、え、あ、あっ♡ ああっ♡♡」

悠真さんの唇の柔らかさや、口内の熱さに変な方向へと思考が持っていられる。

乳首の先から側面まで、彼の唾液をたっぷりとまぶしてあむあむ♡と弄ばれる動きに、私は抗えない快感を感じていた。お店の中の一室で行われる行為への背徳感で、頭がどうにかなってしまいそうだった。

ぬちゅっ♡ ぬりゅんっ♡

「ん、ふ、う……っ♡♡……っ！ は、あ……んっ♡♡」

「……いいですね、その顔。随分と気持ちよさそうに検査を受けてくれる。エロいですね……♡」

「そ、そんな、ちが……っ♡♡」

「少し体勢を変えて『身体検査』を続けますよ」

「え、あ……っ♡」